

の平均 50 cm がチマキザサ節（低木）からミヤコザサ節（半地中植物）への生活形の変化を起こさせる契機となっていることはまさに自然の妙ともいふべきであろう。

### ササの葉の隈どり

ミヤコザサ帯ではすべてのミヤコザサ節の種は冬に葉の縁が白く枯れて隈どる。それに対してチマキザサ帯ではチマキザサ節のうちクマザサはどこでも隈どるが、そのほかの種はミヤコザサ線の近くではよく隈どり、それより内方へ向うにつれて隈どり方がしだいに狭くなって、ある地点に達するとまったく隈どらなくなる。その地点を結んだ線は年最高積雪の極の平均が 75 cm の等深線とほぼ一致する。図 34 は積雪量と隈どりとの関係を示したものである。

しかしここで注意を要することは、積雪量は葉の隈どりと直接の関係がないということである。なぜなら隈どる現象は晩秋におこり、本格的な降雪期の前にすでに完了するからである。それなのにチマキザサ節はミヤコザサ線付近では葉の縁が広く隈どり、積雪 75 cm の地点に達するまでしだいに隈どり方が狭くなり、75 cm 以上になると隈どらなくなるというように、あたかもササの葉の隈どりが積雪量と密接な関係があるように見える

のはなぜだろうか。それについては積雪量ではなく、空中の湿度がおもな要因であると考えられる。すなわち最高積雪 75 cm 以上の所は太平洋側では概して標高が高く（1,000 m 以上）、したがって秋は冷涼であるため、一度雨か雪が降ると土壤が乾きにくく、また雲霧が多く空中湿度も高いと思われる。それに対して 75 cm 以下の所は標高が低く、晴天の日が多く、空っ風も吹くので湿度はずっと低いであろう。要するに空気の乾燥がササの葉の隈どりを起こさせ、湿度が高いことはそれを妨げることになるのであろう。実際に低地で葉がよく隈どっている所でも、谷川の岸边などしづきがかかる所や、また温泉の川辺で湯気が立つ所ではほとんど隈どりが見られない。山の南側の日がよくあたる乾燥地のササはよく隈どり、日があたらぬ北側の、とくに谷あいでは同種のササでありながら隈どりの幅がいちじるしく狭いのがふつうである。

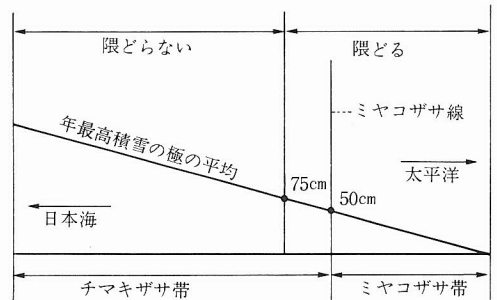


図 34 ミヤコザサ節およびチマキザサ節の分布ならびに葉の隈どりと積雪量との関係